



館林分教場整備隊兵舎 飛行訓練の合間に航空体操をする特攻隊員。終戦後、兵舎は関東女子専門学校(元関東学園大学附属高等学校)に払い下げられ、他は農地や工業団地などになった。館林市史編纂委員会『写真で見る館林』より

振武特別攻撃隊長 2 ～飛行学校教官から特攻隊長へ～

1941(昭和16)年11月に銚田陸軍飛行学校を卒業し、再び教官に復帰した片岡中尉は、館林市大街道の泉重子さんとご結婚、二人の娘さんをもうけられました。しかし、1944(昭和19)年に入ると、戦局は悪化の一途をたどり、1945(昭和20)年2月、熊谷陸軍飛行学校は閉鎖、教育隊は第6練習飛行隊(東部540部隊)に改編されました。同年3月11日には第6練習飛行隊上田教育隊において、同隊の教官及び助教を隊員にして特別攻撃隊が編成され、片岡中尉は隊長に任ぜられました。

言行一致、死を教える

熊谷陸軍飛行学校は、所沢陸軍飛行学校の操縦生徒の教育を行うため、1935(昭和10)年12月に開設されました(所沢陸軍飛行学校第2期生から移駐)。学校本部および本校は埼玉県大里郡(現在の熊谷市西部、現航空自衛隊熊谷基地)に置かれ、少年飛行兵、特別操縦見習士官(注1)、あるいは将校、下士官の操縦学生などに対し、飛行機操縦の基本教育を実施していました。熊谷陸軍飛行学校は本校のほかにも、壬生陸軍飛行場(栃木県下都賀郡)、下館陸軍飛行場(茨城県真壁郡)、館林陸軍飛行場(群馬県邑楽郡)、桶川陸軍飛行場(埼玉県北足立郡)、松本陸軍飛行場(長野県東筑摩郡)、上田陸軍飛行場(長野県上田市)、伊那陸軍飛行場(長野県伊那市)など、各地に所在する既存あるいは新設の陸軍飛行場に分教場(分教所)を設置し、操縦教育を行っていました。

1941(昭和16)年7月に銚田陸軍飛行学校に入校した片岡曹長は、同年11月に同校を卒業し、少尉に任官、熊谷陸軍飛行学校館林分教場(教育隊)付教官に復帰し、再び飛行兵の教育を担当することになりました。

昭和19年5月末に第3期特別操縦見習士官として熊谷陸軍飛行学校に入校し、館林教育隊で訓練を受けた土田直鎮氏(つちだなおしげ)大正13年生まれ・東京大学国史学科卒・東大教授・東大史料編纂所所長・国立歴史民俗博物館館長・日本古代史。平成5年歿は、館林教育隊での訓練と片岡教官を次のように記しています。

「飛行機に乗る以上、先に死が待っているのは常識であったが、飛行学校の教育は厳しかった。『お前たちは消耗品であ

る』という一言に始まる訓示を皮切りに、死ぬことだけが生き甲斐といったような訓練がつづいた。覚悟はしていたものの、死ぬのも並大抵のことではないと思ったりしたものである。(中略)

以後、数個の教育隊を廻ったが、最も厳しかったのが館林教育隊であった。ここは徹底して消耗品速成教育を施した隊で、一切の娯楽を禁じた。面会なし、外出なし、酒保なし、十日に一度の休務と称する日も、午前中は体育でしぼり、昼食から夕食までが唯一の休憩時間で、この間は洗濯・修理や散髪、諸手入れなどの内務整理に追われる。家族の写真もお守りも、千人針も、マスコットもすべて禁止、家族からの検閲済みの葉書三枚以下の所持だけが認められ、頻りに検査があった。写真撮影などは論外である。だから私には、世間にあるような飛行服姿の写真は勿論、隊での写真は一枚もない。どうせ死ぬときまわっている者が、何で人に姿を見せる必要があるか、黙って死ぬというのが趣旨であった。(中略)

今から思えばまったく非情な世界であったが、この中で我々に本当に死ぬ気を感じさせたのは、館林教育隊の私の教官であった。

第1区隊長で、片岡喜作という中尉である。少年飛行兵第1期の出身であるから、30才ぐらいではなかったかと思うが、口数のいたって少ない、派手なところの少しも見えない、つねに厳然たる態度の将校で、いかにも自らを鍛え抜いて来たという感があった。偵察機出身だけに技量抜群で、大陸転戦中に病を受けて内地の教官などを勤めていたのであったが、この教官が学科の時間中、ふとしみじみ

とした面持ちで、『お前たちは支那に行ったら絶対生水を飲むな。俺は支那であまり喉が渴いてたど一回、生水を飲んだために、こんな体になってしまつてご奉公ができないのだ。残念でたまらぬ』と述べた。懐いた声がいまだに耳に残っている。もつとも体が悪いと言つても、どこがどの程度悪いのか、我々はまったく知らなかった。『将校は瘦我慢の連続である』と、我々に教えていた教官であるから、黙って耐えていたのである。この教官は言行一致して実に淡々と死を教えてくれた。

『お前たちも早く上達したいと焦っているようだが、気に病んではならぬ。お前たちは最後には離陸さえできればよい。爆弾を積んで離陸さえすれば、俺が敵の見える所へ連れて行ってやるから、そこでぶつかればよい。それでお役に立つことができるのだから、安心して練習せよ』と、教えてくれたのもこの教官である。我々幼稚園クラスの者が戦うには、ただぶつかるとは方法がないことは自明であったから、教官のこの言葉は我々に大きな安心感を与えた。(東大十八史会編『学徒出陣の記録』あるグループの戦争体験 中公新書 1968(昭和43)年刊)

家族とのひととき

片岡中尉は館林教育隊の教官在任中、下宿先(館林市大街道の泉家)の娘さんであった重子さんとご結婚され、二人の娘さんがお生まれになりました。その泉家の隣町台宿にお住まいで、泉家の方々と家族ぐるみの親しいお付き合いをしていたのが、奥(旧姓関口)純子さんでした。純子さんは当時館林の女学生で、片岡中尉ともたびたび顔を合わせていました。純子さんは後年、片岡中尉のことを「最初

は無愛想に見えて、自分は嫌われているのではないかと思つたほどでした。しかし、しばらくすると、言葉数は少ないけれど心根の優しい、立派なお方だとわかり、心打たれるものがありました。」と、孫の針ヶ谷穂高氏に語っています。片岡中尉は自分の妹たちと同じ年頃の純子さんを他人とは思えなかったのか、妹同様に接していたようです。純子さんも兄さん(昭和19年。ペリユリニュー島で戦死)と年齢も近いためにより一層親しみを覚えていきました。

また片岡中尉は、飛行学校生徒の頃は夏冬の休み、教官時代には休暇を利用してしばしば実家に帰っていました。特に二人の妹、きよさん、まささんと過ごすのがより嬉しかったようです。夜遅く実家に着いた時などは、すでに寝ている二人の間にもぐりこんで、一緒に寝ていました。二人も喜作兄さんが大好きで、下の妹のまささんは、小学校の頃まで喜作兄さんと一緒に寝ていました。実家に帰れない時でも、夏にはセーラー服、冬にはセーターが届きました。帰隊する際に、二人を東京見物に連れていってくれたこともありました。二重橋や浅草を見学し、松坂屋で買い物をしてくれ、カツサンドイッチをご馳走になりました。上野駅で「荒川沖の次の土浦で下車しなさい。」と見送ってくれましたが、その時の少々心配そうな顔は今でも忘れられないそうです。

きよさんが大曾根小学校高等科の時には、空から妹さんたちに会いに来たこともありました。大曾根小学校の上空で飛行機が低空飛行を始めたので、全校生徒が校庭に飛び出しました。ものすごい爆

音にびっくりしながら飛行機を見上げてみると、先生が肩を叩いて「喜作兄さんだよ」と教えてくれました。大人たちは喜作さんの訪問飛行を前もって知っていたようです。片岡機はしばらく旋回飛行、両翼を揺らしての挨拶の後、通信筒を落とし、飛び去っていきまされたが、その通信筒は村の人が片岡家へ届けてくれました。一方、家族も片岡中尉の勤務地を訪ねて行きました。二人は母親のしかさんに連れられて、所沢や館林、松本を訪ねています。また父親の鉄造さんは、自転車の荷台に実家で穫れた作物を一杯積んだ上にお腹にお餅を巻き付けて館林まで出かけていきました。

西筑波陸軍飛行場跡

(陸軍挺進滑空飛行第一戦隊発祥の地記念碑)
1940年開設。1942年蘭領バレンバンに投入された落下傘部隊の訓練基地。滑空飛行(グライダー)部隊発祥の地。訓練の様子は、詩人竹内浩三(1945年フィリピンで戦死が訓練中に綴った『筑波日記』)に見られる。



館林飛行場 1938年に熊谷陸軍飛行学校飛行場として開設。1945年からは第1航空軍第170飛行場大隊が所在し、特別攻撃隊(19隊122名)の教育基地。特攻訓練実施も出撃機会なく終戦。写真の左端;格納庫、写真の右側のテント;隊員の待機所 館林市史編纂委員会『写真で見る館林』より

家族との別れ

1944(昭和19)年11月、片岡中尉は熊谷陸軍飛行学校松本教育隊付教官に任ぜられ、妻子とともに松本に赴任しましたが、翌1945年2月、内地航空教育隊を実戦部隊第6航空軍)に改編する命令が下され、熊谷陸軍飛行学校は閉鎖、教育隊は第6練習飛行隊(東部540部隊)に改編されました。同年3月11日、第6練習飛行隊上田教育隊において、同隊の教官及び助教を隊員にして特別攻撃隊(第81振武特別攻撃隊)が編成され、片岡中尉は隊長に任ぜられました。片岡中尉は隊員たちとともに特攻訓練基地となった熊谷に移動、熊谷航空隊では、超低空飛行やエンジンを全開にして、目標の吹き流しめがけて急降下し、急上昇を繰り返す訓練が続けられました。

その間に片岡中尉は、実家の玉取を訪れ、最後の別れを告げています。その時の様子をきよさんとまささんは次のように語ってくれました。

「特攻出撃前の4月初めだったと思います。熊谷航空隊から作谷の西筑波陸軍飛行場(現つくば市作岡)まで飛んできて、飛行場からは自転車でやって来ました。私たちは知りませんでした、松本から玉取へ移っていた奥様や子供たち、両親や家族に最後の別れを告げに来たのです。私たち二人を連れて、一ノ矢の八坂神社に行きましたが、何も言わず無言で参拝をしていました。実家には一晩泊まって、翌日帰隊しましたが、作谷までは父親が自転車で送って行きました。作谷を離陸すると、実家の上空を低空飛行して、ハンカチを落とし、母校土浦中学のゴシック式校舎の上空から、西の空に消えてい

きました。それが喜作兄さんとの永遠の別れになりました。」

片岡中尉は、両親と奥様には特攻隊長に任ぜられたことを報告しました。その際に母親のしかさんから「戻ってくることはできないのか。」と尋ねられましたが、「そういうわけにはいかないのだ。」と答えたそうです。その時、中尉は「自分の隊の隊員は皆、操縦技術抜群の歴戦の勇士、体当たりなどしなくても敵空母の飛行甲板に250キロ爆弾を命中させて帰還し、さらに出撃を続けられるのに、そうもいかんだ。」と言いたかったのではないのでしょうか。片岡中尉は熊谷基地に戻ると『留魂録』(注2)に「謝不孝 祈健斗 就征空昭和二十年四月六日 片岡喜作」と記しています。

※注1 特別操縦見習士官(略して特操、国民一般には学驚の愛称と呼ばれた。)

※注2 『留魂録』(靖国神社遊就館蔵) 片岡中尉が特攻隊長に任命されてから小月基地(現山口県下関市、海上自衛隊航空基地)出發までの間に、その決意や心境をためたもので、第6航空軍司令官や隊員たちの寄せ書きも記されています。出撃後に遺書とともに遺品として小月基地から重子夫人に届けられ、重子夫人は平成6年7月14日、これを靖国神社に奉納されました。